二次元のテキストから色彩が起ちあがる。

生田　萬

上田誠さんの『来てけつかるべき新世界』に登場する「新世界」とは、最新テクノロジーがもたらす近未来であり、同時に大阪のディープスポット・新世界のことでもある。このとりあわせからぼくは『ブレードランナー』を想起してしまったが、かの映画がアンドロイドVSヒューマンという根源的なアイデンティティ・クライシスを愚直に描いたのに対し、この劇ではコンピュータが人間の知性を超える、いわゆる二〇四五年問題からいくつかの「ネタ」をひろい、AIの進化に対応しきれないベタな新世界の住人たちのドタバタぶりが描かれる。問題を面白おかしく絵解きしてその表層を軽やかに撫でるライトな感覚を楽しめるか、あるいは物足りないと感じるかが作品の評価の分かれ目だと感じた。ちなみにぼくは、かつて『ブレードランナー』のフリークでした。

●棚瀬美幸さんの『これっぽっちの。』には、対比的に描かれる二組の男女が登場する。正規雇用の新中間層に属しながら子育てに参加できない男とその妻、そしてもう一組は、ひきこもりの年長フリーターで社会に参加できずにいる男とその同棲相手。この二種類の「参加できない」男に対し、女はどう「参戦」すべきか。それを演劇を通して提示したいという作者の意気込みが行間からあふれだす。しかし同時に、ソーシャルワーカーのケーススタディにつきあわされたかのような味気無さも感じた。「できる」女性の目から見たら、世の中の男性は「できない」奴ばかり。確かにそのとおりなのだろうが、たとえば、核兵器の忌まわしさを伝えるには、キノコ雲の美しさが描けなければだめなのではないだろうか。

●村上慎太郎さんの『ハイアガール』は、「三人称の死」をめぐる劇だ。

ぼくたちは自分の死について知ることはできない。その意味で自分の死は存在しない。一方、ニュースでは毎日さまざまな「三人称の死」が報じられる。自分ではなく、死ぬのはいつも他人ばかりなのだ。この劇でも、冒頭、おもむろに銭湯の煙突からひとりの少女が飛び降りる。まるで雨が降るように、町の人々の上にふりかかった「彼女の死」。それが町の人々になにをもたらし、あるいはもたらさなかったか。哀しみや罪障感や無関心その他いろいろを乗り越え、人々に「死」が受容されてゆくプロセスを、作者は紋切り型の情緒や感傷とはまったく無縁な軽妙なタッチで描きだす。読み進むにつれて行間から舞台が起ちあがるのを感じた。煙突のセットを中心に配置された大小の演技スペース。そこで同時多発的に展開する短いシーンの連なり。このテンポ感は映画でいえばカットバックであり、シーンの連鎖が観客の心に生みだす情感はクレショフ効果だろうか。しかし、そんな妄想を嘲笑うかのように、この作品はあくまでも演劇的だ。テキストから浮かびあがるのは、作者がサディスティックに追い込む俳優の身体の躍動であり、その身体から弾丸のように発射される言葉（セリフ）の生みだす予想不能なサスペンスだ。読んでいるこちらま

で汗をかくような力作。今回受賞に至らなかったのは、次回作が読みたいという強いメッセージと思ってください。

●田中遊さんの『私と本屋の嘘』は、選考会に臨むにあたりぼくが大賞に推したいと考えた作品だ。

主人公の男は、医師から知らされた母の余命宣告を本人に伝えるべきか苦悩する。その様子が、本屋で「赤い本」を探して歩き回る幻想体験として描かれる。本屋とは、人間のありとあらゆる知識と情報が何層にもわたって蓄積された場所。あるいは、母の思い出、いや、母の脳内かもしれない。まるで愛する人を探して冥府をさまようオルフェのように、主人公は母の死の意味を求めて本屋の迷宮を奥へ奥へと進む。そうした幻想の時間と現実とが入れ子になって劇は進行する――かのようにも見えるが、実は、現実を含めたその劇全体が「赤い本」に描かれた物語でもあるという、内部と外部が通じ合うクラインの壺のごとき極めて個性的な入れ子構造を作者は仕掛けている。

ここに書かれているのは、「母の死」と「私の死」のあいだで人称を往還させながら語られる冥府めぐりの「死」の物語。人は決して「自分の死」を知ることができないならば、「母の死」はどうだろう。それは、テレビのニュースで見る「三人称の死」とどうちがうのだろう。冥府めぐりの果てに、主人公は「ともに生きてきた人との別れ」という人称を超えた死の意味に向き合い、そして、劇は終わる。しみじみと胸に迫るラストシーンが美しかった。それだけではない。めくるページのその背から消えてゆく絵の具で描かれた絵本のように、売り場から売り場へ鮮やかな色彩の変化を感じさせる本屋の冒険。次々に出現する売り場たちのめくるめく展開が夢のように美しかった。

●山崎彬さんの『メロメロたち』の主役は、音楽だ。いや、というより、観客席にライブで襲いかかる大音量のノイズだ。その音の津波は、世界に「ゼロをかけて」すべてをなしにしてしまう。タイトルの「メロメロ」とは、「×０（かけるゼロ）」なのだった。

劇中の各シーンのタイトルには、ほとんどに「戦争」の二文字が登場する。戦争と音楽、戦争の音楽、戦争は戦後を知らない、やがて戦後は戦前となる、などなど。つまりこの劇は、北朝鮮問題が緊迫の度を増すなか、平和ボケのお花畑に暮らす日本人に警鐘を鳴らすアジプロ演劇を標榜しているのか？　もちろん、そうではないだろう。むしろ、そうした時代に演劇活動を戦いつづける者としての、すなわち、常在戦場――日々戦いに命を燃やす作者の芸術家宣言として読むべきだとぼくは思った。だから、この劇のストーリーや登場人物を語ることにはほとんど意味がない。たとえていえばこの劇は、デッサンよりも色彩に命を託した絵画なのだ。

大賞に推すべきか悩んだ。「こんなもの演劇じゃねえ！」と叫ぶことこそこの作者に対する真っ当な向かい方だと思ったからだ。しかし、大賞にふさわしい苛烈な構えを備えた作品であることは疑いない。おめでとうございました。